藤井　友紀さん　（山口県周南市出身）
2014 年度 3 次隊　青年海外協力隊
派遣国：ラオス　　職種：日本語教育
2015 年 9 月 27 日（日）中国新聞 SELECT 掲載

※中国新聞社の許諾を得ています

日本語学科 新設後押し

端午の節句について学び、新聞紙でかぶとを作った第２外国語選択の学生たち

「今、一番行きたい国」と欧米諸国でいわれながら「アジアの最貧国」の一つでもあるラオス。そう聞くと飢えに苦しみ、一日の生活にも苦労するようなイメージを持ってしまいがちだが、ラオスは豊かだ。南部のサバナケットという町で日本語教師をしている私が接するラオスの人たちは笑顔にあふれている。

ラオス人の朝は早い。６時ごろから托鉢が始まり、仏教の行事がある日には街中にお経を読む声が響き渡る。私は国立のサバナケット大へ 8 時前後に出勤する。通勤ラッシュは８時ごろ。一斉にラッシュになり主要道路はバイクと車でごったがえす。一日の終わりも早い。４時ごろから家路につき、夕方は軒先で家族や友人と涼みながら食事を共にし、早々と眠りにつく。

私が休日に目にする光景も豊かさを実感させる。道端にマンゴーやココナツがなり隣人同士で分け合う。雨期には辺り一面が田んぼに変わり収穫の時を待つ。見知らぬ外国人の私に、警戒することなく優しい笑顔で「サバイディー（こんにちは）」と手を合わせてくれる。

サバナケット大では第２外国語で日本語を選択した５クラス計１４０人と、夜間の社会人向け１クラス２０人程度を担当している。今後、言語学部内に日本語学科を新設し、学科運営の手助けをするのも私の使命だ。今は日本語を学びたいという潜在的な需要を掘り起こすべく、役所や日系企業などに働きかけをしたいと思っている。